

戦前期の観光における沖縄イメージの形成

—国家主義時代の観光と知—

多田 治

キーワード 沖縄、イメージ、観光、国家主義、ジェンダー、郷土、知、沖縄学、柳田國男、島袋源一郎、日琉同祖、柳宗悦、方言論争

一、はじめに——本論の問題設定と位置づけ

一八七九（明治十二）年の琉球処分で日本国家に組み込まれて以来、今日に至るまでの近代沖縄の歴史は、日本本土からのツーリストとの関係の歴史でもあり、外からまなざす沖縄イメージと向き合う歴史でもあった。

沖縄イメージとは、沖縄を対象としてとらえる（見る／認識する）際の、知識・解釈・評価の枠組みのことでもある。それは時代の政治経済的な文脈に左右されては方向づけられ、たえず形を変えていく。沖縄イメージの形成・変容のプロセスと、それをめぐる人々の諸実践・諸制度を、詳しく具体的に明らかにしていく作業は、近代沖縄の社会変容を、日本本土や他地域との関係性や相互作用に重点をより置いてとらえ返していく意味でも、

新しく有効な知見を豊富に与えてくれるはずである。

私は明治期から今日まで、近代沖繩の長期的な観光の歴史に焦点を当て、そこから沖繩イメージの発生・展開のプロセスをたどっていく研究を進めつつある。観光・交通サービスの提供者や関連メディア、ツーリストたち自身によって、いかなる沖繩イメージが立ち上げられては受容され浸透し、時代とともにどう変わってきたか。その内実を具体的に検証していく中で、そこから浮かび上がる諸問題に対して、多面的な角度から考察を加えていきたい。本論はその第一段階として、戦前期の沖繩観光に対象を定めるものである。¹⁾

ただし観光に焦点を当てるといっても、観光そのものが、一見直接には観光と無縁に思えるような学問・メディア・芸術・産業・国家・教育・開発・エンターなど、他のさまざまな領域・要素とも密接に関わり合ってくる、総合的な現象である。文脈によっては、沖繩イメージが観光以上にこれらと関係してくる場合もある。そのため私は必要に応じて、それらにも深く立ち入って言及する立場をとる。

ところで、私はすでに『沖繩イメージの誕生』で、一九七五年の日本復帰記念イベント・沖繩海洋博を沖繩の観光リゾート化の起爆剤として位置づけ、集中的に検討した(多田、二〇〇四)。たしかに海洋博は、復帰後の沖繩の観光立県と、青い海・亜熱帯・独特の文化に代表される沖繩イメージの広がり、決定的な起点となった。一九七一年に二十万人だった沖繩への観光客は、日本復帰の七二年には四四万人に倍増し、海洋博開催の七五年に一五六万人と、初めて百万の大台に乗る。翌年には反動不況で観光客は減ったが、七七年からは再び増加の一途をたどっていく。今日の規模で、沖繩がマス・ツーリズムの場所へと押し上げられた決定的な転機が、海洋博であったことは明らかである。

とはいえ、規模的にははるかに小さく認知度も低かったにせよ、すでに復帰前や戦前にも沖繩観光は行われ、

その中で沖縄イメージも機能し始めていた。今日のマスの規模にはほど遠いが、沖縄へのツーリズム自体は、戦前からゆるやかに始まっていたのである。しかも、これらの時期に地味ながら確立されつつあった観光とイメージは、復帰後に観光立県と沖縄イメージの普及が大々的に進められていく上で、一定の基盤にもなっていく。

「昔からあると思われるものが、実は最近創られた新しいものである」場合が多いことは、ホブズボウムとレンジャーが『創られた伝統』で示し、社会学や人類学、歴史学などでは今や常識化した定説になっている。だが実は、逆のこともまた言えるのだ。すなわち、「最近できた新しいと思われるものが実は、前段階の形をとりながら、昔からあった」という側面である。戦争をはじめ、近代の劇的な事件や変動の陰に隠れて見えにくくなった歴史の連続性にも、目を向けていく必要がある。

しかもこの二つの側面は、必ずしも矛盾しない。連続性と非連続性という、特定の歴史のなかに並立する、二つの相を表しているのである。したがって大切なことは、こうした歴史の変動のなかの連続性と非連続性を、両面ともに丁寧に見ていくことである。「反復しつつ変容する」「変容しつつ反復する」のが、歴史のダイナミクスであるといえよう。

その意味で本研究は、沖縄への観光とイメージをより長期的に扱う点で、復帰・海洋博という特定の歴史的局面を扱った『沖縄イメージの誕生』と対をなし、相互補完的な関係に位置する研究であることを、申し添えておきたい。⁽²⁾

二、観光と近代

(一) マッカネルの視点

社会学者マッカネルは、観光研究の先駆的な著書 *The Tourist* において、ツーリストという立場は、近代社会の構造を映し出す存在だと指摘している (MacCannell 1976, 1-16)。前近代の社会では、閉じた共同体の「内／外」「仲間／よそもの」「我々／彼ら」といった区分は、厳格に保持されていた。近代において社会関係の範囲が拡大し、交通・情報メディアの発達とともに社会移動が高まってくると、異界の他者との出会い・交渉・包摂はたえず不可避に進み、こうした二項対立の壁はよりオープンで曖昧なものになっていく。個々の社会集団は、外来者の視線に対してより意識的・自覚的になり、公的な顔を見せるようになる。

マッカネルは、ツーリストの存在が、近代社会の構造には欠かせない組成要素であり、観光が近代社会と切り離せない関係にあることを示している。高度に細分化し、全体を見通すのが困難なほど複雑化・不透明化した近代の社会に対して、表層的にであれ、外側からその全体像を見渡し、社会構造を垣間見る立場にあるのが、ツーリストなのだという。

他方でマッカネルは、ツーリストの立場に、近代人の実存様式を投影している。近代社会が著しく発展・拡大し、変容していく度合いは、個人の生活の圏域や意識のレベルをはるかに超え、置き去り感を与えるほどにまで進行していくものであった。近代のなかで個人は、非常に広い範囲の世界に包摂されながらも、直接にはごく限られた局所的なリアリティしか感受できないという、逆説的な両面性を生きている。近代の膨張とともに、個人

はますます部分的な存在にとどまらざるをえない。この点は、顔の見える地縁・血縁的な共同体と直結し、その全体性の中でリアリティの大部分が完結していた、前近代的な状況とは明らかに異なっている。

この近代状況のなかで個人は、いま自分が生きる目の前の状況がリアルでオーセンティックなものかどうかという、確からしさの感覚を得られないような、不安な実存状況に置かれていく。こうした近代的日常のなかで多くの人は、「ここではないどこか」にこそ「本当のもの（オーセンティシティ）」がある（かもしれない）と想定し、それを求めて探し歩き、のぞき込もうとするようになる。その意味でツーリストは、近代人の実存的ありようを典型的・象徴的に表した存在でもある。

したがってマツカネルの視点を借りれば、ツーリストとは単に、観光という特定の意味領域に限定された個人的な存在にはとどまらないことになる。ツーリストとは、客観的な構造条件においても主観的な実存意識においても、近代という時代に必然的に産み出されてくる、歴史的・社会的な存在様式でもある。ならば、ツーリストを切り口にして、近代社会のひとつの断面にアクセスしていく手法も、おそらく可能であるだろう。

(二) 方法としてのツーリスト

さて、琉球処分以後の近代沖縄もまさに、本土ツーリストたちの外からのまなざしにさらされ、その沖縄イメージとの関係のなかで、変容をとげてきた。明治大正以来、沖縄を研究しに来るフィールドワーカーも、観光に来るツーリストも、外来の客として外から沖縄を見てきた点では共通する。地元の人からすればともに、生活の表層を一時的にのぞき見して帰るよそ者に見え、しばしば揶揄や違和感、攻撃の対象にさえなってきたものだ。

しかし同時に、観光による地域経済の振興という文脈では、むしろ観光客の受け入れは熱烈に求められてもき

た。ツーリストとは観光地の地元側にとって、積極的に受け入れるべき対象であると同時に、疎遠な違和感の対象にもなるという両義的な存在であり、そうした形で地元が否応なく関わり続けざるをえない、どっちつかずの存在なのだ。

しかも、それだけではない。オーセンティックなもの、「本当の沖繩」なるものをわざわざ探し求めてきたのは、地元の人よりは遠方からのツーリストであった場合が多い。ツーリストが発見した「本当の沖繩」への視線を、沖繩側が内部に取り込んで自らのものとし、産業振興や地域活性化に活用したり、郷土意識のよりどころにしたる営みも、今日まで繰り返されてきている。そもそも、ツーリストが外から来て沖繩をまなざしていく視点も、多くの場合は地元の案内人の導きを受ける中から醸成されてきた。沖繩へのツーリストのまなざしは初期の段階から、本土と沖繩との相互作用・関係性のなかで生み出されてきたのである。

そこで、日ごろ常識的には「表層的」と揶揄されがちなツーリストの視線をあえて逆用し、「方法としてのツーリスト」を自覚的に採用することで、本土と沖繩との関係性・相互作用の視点から、新たに沖繩をとらえ返すことができるのではないか。明治以来のツーリストのまなざしと言説、またそこに関わる人々の諸実践・諸制度を対象化し、その推移を反省的・批判的に解釈しながら、沖繩社会の変容、沖繩と日本との関係の変容をとらえていく立場である。その意味で本研究は、ツーリストを通して浮かび上がる、「沖繩の近代」の新たな諸様相を明らかにしていきたいと考えている。

三、帝国主義・植民地主義と近代観光——戦前期日本の状況

(一) 国際観光

ところで、近代と観光の関係を問いなおすとき、国家の主導的な力と、帝国主義・植民地主義の影響を忘れてはならない。すでによく知られるように、十九世紀イギリスに世界空前の規模のマス・ツーリズムが確立した契機は、一八五一年のロンドン万博の時期に、トーマス・クックが旅行代理店を産業化して団体鉄道旅行を大衆に広く提供したことだった。このロンドン万博は、ガラス建築の水晶宮に国内の工業製品や世界の産物を集めて一堂に展示することで、大英帝国の圧倒的な国威を国内外にアピールし、植民地支配を正当化する政治的な祝祭としての色彩が強かった。イギリス中産階級の観光のまなざしは、この万博と結びつく形で立ち上げられた。世界に対して優越した視点に立つ、この「見る主体」の形成が、世界に誇る帝国の経済力と軍事力を背景にしていたことは明らかである。

日本における戦前期の観光にも、文脈は異なるが、帝国の力が大きく働いていた。そもそも、幕末期に日本が近代へ突入していく重大な契機は、黒船来航により開国を迫られ、逃れがたい外圧を意識した時であり、帝国主義的な活動を世界に展開する西洋人たちによる、東洋の異国の風景・文化へのエキゾチックなまなざしを向けられたところからでもあった。日本は当初「見られる客体」として、西洋中心の近代世界の中に位置づけられた。

日本の旅行業が生まれたのは、幕末の開国期、こうして来航した外国人向けにであった（白幡、一九九六、十七―四六）。明治二六（一八九三）年、外国人旅行者の増加を図るため喜賓会という団体を設立したのは、西洋文

明への仲間入りを熱烈に求める政財界の要人たちだった。当時、欧米の上流社会では世界一周旅行が流行し、その中に日本も組み込まれ、日本政府は接待に頭を悩ませた。ツーリストという外圧にも、明治の日本は直面したのである。

明治四五（一九一三）年にはジャパン・ツーリスト・ビューロー（現在のJTB）が発足し、喜賓会の役割を引き継ぐ。鉄道院が中心となり、日本郵船・帝国ホテル・南満州鉄道などが出資して、主に外国人旅行者を誘致・案内した。日露戦争後の領土拡大・植民地経営に伴って日本への批判的な国際世論が高まったのに対し、日本のイメージアップを図るねらいもあった。この時期の帝国主義的な膨張とともに、日本の観光事業は徐々に、対外宣伝、プロパガンダとしての意味合いをおびていくのである。

昭和に入って世界的な不況が訪れ、経済状況が悪化すると、国際観光政策は外貨獲得に積極的になっていく。特に観光宣伝のターゲットにされたのはアメリカだった。昭和五年、鉄道省の外局に国際観光局が設置され、日本に初めて「観光」を名乗る行政機関が誕生した。鉄道省を中心に、政府は「国策」として観光を推進し始めたのである。昭和四年には国立公園法が制定され、九年に全国八つの国立公園が指定されたのも、外国人観光客の滞在日数を延ばさせ、外貨収入を増やすねらいがあった。実際、太平洋戦争への直前期まで、来日旅行者と外貨収入は飛躍的に伸び、日本観光ブームが到来していた。このように戦前期日本における観光の誕生は、国家主導で進められ、高度に政治性をおびていた。

他方で日本人が、帝國的な観光のまなざしの「見られる客体」から「見る主体」の側に回ろうとしていく一つの契機は、明治三八（一九〇五）年、日露戦争の勝利であった。有山輝雄が詳しく明らかにしているように（有山、二〇〇二）、この勝利の翌年、朝日新聞社の主催で「満韓巡遊」という、満州・韓国への団体旅行が行われて

いる。これが、日本最初の海外パックツアーであった。日露戦争の激戦地が終戦の翌年には観光に選ばれたのであり、申込が殺到した。この旅行ファイバーは、日清・日露戦争で日本軍が勇敢に戦った現地を、そして日本国土の外延が広く拡大してできた「外地」を、直接この目で確かめてみたいという、帝国民の優越した身体感覚の表れでもあった。以後、太平洋戦争が始まるまで、満州・韓国・台湾への植民地観光は活発に行われていく。大正一三（一九二四）年、日本旅行文化協会が設立され、旅行雑誌の元祖『旅』を創刊する。創刊号の南満州鉄道の広告には、「旅行シーズン来る 朝鮮へ！満州へ！支那へ！」の文字が躍動していた。植民地主義と観光は、直結していたのである。

（二） 国内観光

一方、いわゆる「内地」の観光はどうだったか。大正から昭和にかけて、国内観光もすでにかなり活発化していた。都市中間層の間で旅行趣味が広がり、団体旅行・避暑・ハイキング・登山・スキー・海水浴などが流行していた。

高岡裕之が指摘するように、常識的にはファシズムとツーリズムは相容れず、前者が後者を抑圧するかのよう
に想定されがちだが、実際には昭和十二（一九三七）年に日中戦争が始まってからも、直後の自粛期を過ぎれば、むしろツーリズムは拡大・高揚してさえたのである（高岡、一九九三）。「戦時下にもかかわらず」、「戦時下だからこそ」高まる種類のツーリズムである。同時期のドイツ・イタリアのファシズム下でも、同様にツーリズムが高められていた。

昭和五年からの一九三十年代、観光政策を「国策」として打ち出した政府は、地方自治体にも観光事業への取

り組みを促し、全国の地域の「郷土」意識を半ば強制的に巻き込んでいく。地域の特色をアピールするために新民謡や小唄の創作、観光映画の制作、ラジオの郷土番組などマスメディアが活用され、祭りや博覧会などのイベントが各地で行われた。観光道路や公園、郷土の偉人・伝説の発掘、土産物コンテストなど、観光資源の開発・整備も行われた。こうした挙国的な観光キャンペーンの流れの延長上にあっただのが、昭和十五年に皇紀二千六百年記念として招致・決定されていた東京オリンピックと日本万国博覧会の開催計画であった（古川、一九九八）。結局これら二大国家イベントは、日中戦争の勃発により中止されたが、もし開催されていたなら、さらに大きな観光ブームが起こっていただろう。

この時期の観光は明らかに、総力戦体制、軍事キャンペーンと密接に結びついていた。昭和十（一九三五）年、広島県呉市の「国防と産業大博覧会」では、軍港が観光資源として扱われ、七十万人もの入場者を呼んだ。当時の国民の軍事・戦争への関心の高さを表している。また、奈良や楠公ゆかりの地など、天皇制と関連する地域も脚光を浴びた。軍事・天皇制に関わる観光地は修学旅行の行先にもなり、皇民化教育とも直結していた。

昭和十二（一九三七）年に日中戦争が始まると、一時は旅行の自粛ムードが広まったものの、翌年にはツーリズムが復興してくる。戦況が落ち着き、景気が上向いたこともあるが、より積極的な要因は、国民精神総動員運動や厚生運動が、ツーリズムとも直結していったことである（高岡、一九九三、二六一―三二二）。総動員体制のもと、スポーツや旅行によって健全な心身を鍛練することが、「銃後の国民」の責務としてとらえられたのである。昭和十五（一九四〇）年には皇紀二千六百年奉祝の一環として、国家規模のツーリズムが組織化される。奈良・伊勢・宮崎の「建国聖地」巡拝旅行が実施された。この年、奈良県を訪れた観光客は三千八百万人を超え、前年より二千万人以上も増えたという。その観光客の中には朝鮮・満州・樺太・台湾といった「外地」も含まれ、聖地への

ツーリズムが、帝国全域に及んでいたことがうかがえる。

以上のように、戦前期日本における観光のまなざしは、国内・国外ともに、当時の帝国主義・植民地主義と密接に結びついていった。政府主導の観光国策において、tourismに訳語を当てた「観光」とは文字どおり、国の「光を観る」行為であった。外地では植民地へ、内地では軍事と天皇制にまつわる地へ。外地の異国の風景を珍しがるのとはまた対照的に、内地の美しく日本的な自然・伝統・聖地を訪れ、現地を直接知ることが、国を愛することに直結していくのであった。

四、戦前期の沖縄観光——パックスツアーの誕生

さて、このような戦前期日本の観光の中で、沖縄観光はどのような位置づけにあったか。当時の沖縄は、国内の代表的な観光地と比べれば認知度は低く、まだ観光客はごく小規模にとどまり、観光開発も進んでいなかった。これは、帝国政府が資源の乏しい沖縄よりも台湾に重点を置いて統治・開発を進め、沖縄には力を入れていなかったことが、背景要因として大きい。例えば大正十三年に大阪―那覇間の直行大型船が就航するまでの時期、大阪から台湾まで一万トンの船が四日間で行けたのに対し、沖縄へは千五百トンの船で一週間もかかっていた^③。本土からの距離ははるかに遠い台湾の方が、ほぼ中間地点の那覇へ行くより速く、短時間で行くことができたのである。沖縄の産物が少ないのと、那覇港が小さかったため、巨大な船を停泊できない事情もあった。本土からの距離の遠さと交通の便の悪さは、観光にも阻害要因となっていた。

先に見た「国際観光／国内観光」「植民地／内地」の分類で言えば、沖縄はその中間に位置するような、微妙な

立場におかれていた。琉球処分以降の沖繩は、政治面と学術面の両方から、日本の国内⇨沖繩県として明確に画定され、台湾・朝鮮・満州などの「外地」とは異なる扱いをされていた。ところが、では沖繩が「内地」なのかという点、実は当時の言葉の使い方によって異なり、内地に含まれる場合も含まれない場合もあった。

例えば、「沖繩から内地に来る」「内地に見ることのできない熱帯植物」「沖繩の市場は内地とは異なる」「近頃は沖繩もすっかり内地化した」などの言い回しは、沖繩と内地を明確に区別している。他方、「台北とはちがいが、沖繩は内地である」といった表現は、外地⇨植民地と区別する形で、沖繩を内地の中に入れている。つまり、沖繩を日本本土と差異化するのか、植民地と差異化するのかという文脈のちがいによって、沖繩が内地に含まれるか否かは変わってくるのであった。⁽⁴⁾ このこと自体が、国内の最周縁地域としての、沖繩の微妙な位置づけを表していた。

例えば、典型的な言い回しはこうである。「日本の内地でありながら、遠く南に偏在するため、独特の南洋情緒を湛えてゐる沖繩島⁽⁵⁾」。これは、商船会社の旅行団募集の文だが、日本の国内にありながらその最南端にあることから、「独特の南洋情緒」が発揮されていると言う。つまりこの情緒は、日本というナショナルな同質性の前提と、その南端という異質性が両立することで醸し出される。内地であって同時に内地でないような、沖繩の独特で微妙なポジションが、植民地観光とはまた別の、沖繩観光に固有の感慨と喜びを与えていく。「琉球！内地にも、かく異国情緒豊かな処があるといふ事は、小さい旅行家―海外漫遊に出掛けられない貧しい旅行家にとって、実に喜ばしい事である。」⁽⁶⁾ 沖繩⇨琉球は、異国情緒あふれる独特な「内地」として、海外までは行けない貧しい旅行家にも格好の地とされた。日本人ツーリストにとってこうした沖繩の異国情緒は、昔を懐かしむノスタルジアという形をとって感受されてくる。

戦前期、沖縄観光の交通手段は、ほとんど船に限られていた。明治十八年以降、大阪―沖縄間の航路が開設され、細々と沖縄観光は行われていた。例えば明治四三年には地方新聞社の主催で実業家二四名が沖縄に視察に来ているし、同じ年、関西から一〇七名の観光団が来ていたようだ（沖縄観光協会、一九六四、一）。大正四年、那覇港に築港が完成し、那覇―鹿児島間が政府の補助金で定期航路となり、毎月十回の往復が行われるようになる。当初は複数の会社が沖縄航路を出し、激しい競争や協定、買収などの複雑な経緯を経て、大阪商船が沖縄航路を独占するに至る。大正十三年には二千三百トンの高速船「台北丸」が大阪―那覇間に就航、片道三日間と便利になった。さらに昭和三年、三千三百トンの台中丸・台南丸が就航する。大型化に伴い、沖縄へ観光に行く人が次第に増加すると並行して、沖縄から内地や海外で働くために移民する人々も増加していく。

昭和十二年、沖縄観光の大きな転機が訪れる。大阪商船が新たに四千七百トンの大型新造船、波上丸・浮島丸を導入、神戸―那覇間は一日短い五十時間に短縮されたのである。大阪商船はこれらの船が、「将来沖縄産業文化の一端に、いささかたりと貢献するところあるならば、弊社の欣快これに過ぎない」と、沖縄の産業・文化への貢献意欲をアピールしていた。沖縄でもこの新造船導入はかなり注目され、歓びと期待をもって迎えられた。

大阪商船はこれに伴い、沖縄視察団を募集した。これが、本格的な沖縄パックスターの誕生であると言つてよいだろう。昭和十二―十五年の二十三回にわたって、毎回の定員二十―三十人ぐらいで行われた視察団はほぼ毎回満員で、好評だった。募集広告は「あらゆる角度からわが国唯一の観光処女地を視察見学するものであります。」とつたっていたことから、沖縄が従来注目されていない新しい観光地であったことがわかる。『海』昭和十二年六月号の巻末には阪神パークと水族館の広告が掲載されており、「黒潮をわけ珊瑚礁を探りて 第一回南遣部隊琉球より帰る 絵よりも美しい珍魚二千尾『南海珍魚展』が宣伝されている。この時期、沖縄・琉球の南の異国情

緒への注目が、徐々に高まっていたことは確実である。

なお、この時期の旅行者は、大阪那覇線か鹿児島那覇線で行ったため、多くの人たちが実際に降り立った島は、奄美大島と沖繩本島に限られていた。宮古・八重山の先島諸島に行くにはまた別の便に乗らねばならず、渡ったのは政治家や研究者など、仕事や用事のある一部の人たちだった。そのためこの時期の沖繩への観光とイメージは、圧倒的に沖繩本島に偏り、特に那覇・首里を中心に形成されていたと言えることができる。

五、大阪商船主催の沖繩視察団——当時のモデルコース

大阪商船が発行していた広報雑誌『海』は、会社の宣伝用というバイアスを考慮する必要があるとはいえ、当時の沖繩観光を伝える貴重な資料である。この雑誌には、昭和十二〜十五年の間に二十三回行われた大阪商船主催の沖繩視察団についての情報が、数多く掲載されている。もちろんこの時期でさえ、視察団で行った人たちは沖繩への旅行者の一部ではあるが、彼らの旅は「貸切自動車で最も合理的に名勝風色をさぐり」、⁹⁾ 当時の典型的なモデルコースを見て回って標準的な観光を行った点では、大いに参考になる。この旅行団は、具体的にどのようなルートで沖繩を観光したのだろうか。

昭和十五年二月の第十六回沖繩視察団を例にとってみよう。旅行団は神戸を出発し、七泊八日で神戸に帰ってくる。募集人員が一等四名、二等十七名、計二十一名(第十六回の参加者は実際には十四名)、会費は一等百二十円、二等百円だった。神戸港で盛大な見送りを受けて出港し、高知の室戸岬を回って九州東海岸と薩南・奄美諸島に沿って南下、二日後の午後四時近くに那覇港へ入港した。船を降りてすぐに四台の自動車に分乗し、まず波

上神社を参拝した。次に南部の漁師町・糸満を見学して、旅館に引き上げ入浴後、辻の三杉樓の懇親会へ。本格的な琉球舞踊と琉球料理を堪能した。

二日目は、崇元寺・識名園・首里城・郷土博物館・沖縄神社など、那覇・首里市内のかなり多くの歴史的な名所を回る日である。壺屋で陶器、工業指導所で染織・漆器などの伝統工芸も見学した。二階殿で昼食した後、沖縄らしい背景を選んで、一同記念撮影。桃園農園で休憩し、夕食後は、団員のため特別に上演される沖縄古典劇を楽しんだ。

三日目は、往復二十里以上も車を走らせた。サトウキビやソテツの南国風景を味わいながら北上し、読谷の残波岬へ。比謝川へ行き、別荘風の家で昼食。沖縄製糖嘉手納工場を見学した後、商業学校で空手術を見た¹⁰。以上をまとめると、沖縄本島三日間滞在のうち、一日目は南部、二日目は那覇・首里、三日目は中部へ北上、という行程である。

前後するが、昭和十二年四月の第三回視察団では、沖縄を語る座談会が開かれている。「団体旅行なんて軽蔑していたが、風物や人の和、何もかも満足した」「こんなよい所になぜもっと早く来なかったか」「現代の思想動揺期に、もっと多くの人が沖縄に行くべき」「昔のままの姿を失わないでほしい」など、広報誌なのである程度差し引く必要はあるとはいえ、団員は総じて、沖縄旅行に満足と感激の声を伝えていた¹¹。

六、観光客は沖縄の何を観たか

では、沖縄への観光客たちは、具体的に沖縄の何を見て、どのような感慨を抱き、いかなる沖縄イメージを持

表1 戦前期の主な沖縄の旅行記・観光ガイド

西暦	元号	執筆者	書名・文名	職業	掲載誌紙
1894	明治27	笹森 儀助	『南鳴探験』	政治家	
1895	明治28	奥島 憲順	『沖縄旅行の栞』	不明	
1914	大正3	横山 健堂	『薩摩と琉球』	評論家	
1921	大正10	折口 信夫	「沖縄探訪手帖」	学者	
1925	大正14	柳田 國男 本山 桂川 深見 麗水	『海南小記』 『南島情趣』 「琉球への船路」	学者 学者 船長	朝日新聞 『海』5～6号
1929	昭和4	辻井 生	「お奨めしたい琉球旅行」	教員	『海』20号
1930	昭和5	秋守常太郎 布田 虞花	『沖縄土産』 「琉球国記」	著述家 会社員	『海』21号
1932	昭和7	島袋源一郎 安藤 佳翠	『新版沖縄案内』 『沖縄への旅』	教育者 学者	
1934	昭和9	大野 夢風	「琉球遊記」	画家	『海』39号
1935	昭和10	下村海南他 能登 志雄	『南遊記』 「先島諸島瞥見記」	マスコミ 学者	朝日新聞 『地理学』3-5
1936	昭和11	米倉 二郎	「沖縄の旅」	学者	『海』61号
1937	昭和12	松田 毅一 板原兵三郎 佐藤惣之助 安藤 盛 小川 千甕	『台湾・沖縄の旅』 『沖縄視察記』 『旅窓読本』 「沖縄風景」 「沖縄一見」	中学生 不明 詩人 マスコミ 画家	『海』64号 『海』70号
1938	昭和13	阿部 金剛 佐藤惣之助 辻井浩太郎 木村 杏園 伊東 清永 辻村 太郎 後藤 清	「沖縄の印象」 「沖縄の風色」 「沖縄観光の思ひ出」 「沖縄視察団と共に」 「沖縄紀行」 「沖縄航路の景観」 「沖縄のこと」	画家 詩人 教員 画家 画家 学者 教員	『海』76号 『海』77号 『海』80号 『海』82号 『海』84号 『海』86号 『海』87号
1939	昭和14	柳 宗悦 河村 只雄 加治屋隆二 小西 和 山本 顧堂 鳥海 青児	『琉球の富』 『南方文化の探究』 「沖縄の印象」 「沖縄巡遊記」 「沖縄観光」 「沖縄行」	評論家 学者 画家 政治家 綿業者 画家	『海』88号 『海』90号 『海』93号 『海』99号
1940	昭和15	小西 海南 河邊 昌之 竹中 郁 保田與重郎 川端弥之助	「人魚の嘶」 「沖縄の印象」 「首里月映」 「沖縄の印象」 「沖縄禮讃」	政治家 不明 詩人 評論家 画家	『海』100号 『海』103号 『海』104号 『海』106号 『海』107号
1941	昭和16	島袋源一郎	『琉球百話』	教育者	

ち帰っていたのだろうか。これについては、視察団の団体客と一般の個人旅行者を分けられない方が適切と思われるので、合わせて検討した結果を見ていく(表1参照)。団体客も個人客も、主に見て回ったところやそこで抱いた感慨・エピソードは、驚くほど似通ってパターン化されている。これはおそらく、地元以案内人の回り方・見せ方や語り、また当時の旅行案内書や沖縄関係書の影響によるところが大きいだろう。以下のように、こうした均質化された主要パターンの代表的なものを抽出していくと、当時、戦前の時点で早くも、沖縄観光と沖縄イメージの枠組みがすでに確立されつつあったことが、浮かび上がってくるのである。

船から観る島々——奄美と沖縄

現在の沖縄旅行と決定的に異なるのは、海上をゆっくり日数かけて移動していた点である。船の旅は、途中のゆっくり流れる雄大な南国の海を、存分に眺めて楽しむことができた。たいていの沖縄旅行の紀行文では、那覇に着くまでに見た風景の様子が、パノラマ的な連続性をもって、こと細かに描かれている。出発地の神戸の夜景に始まり、瀬戸内海または紀伊・室戸岬の美しい眺望を経て、大分・宮崎・鹿児島を南下、さらに薩南・奄美の個性ある島々の情趣を味わっていく。「九州薩摩の沖から台湾にかけて、ゆるい弧線を描いて沖縄列島が断続してゐる。南へ、南へ、それは丁度われわれの南方関心をそそる飛び石の如くでもある。」¹²⁾次々と姿を現す島々は、当時の日本人の南方への関心を一つ一つ充たしていく役割を与えられていたのである。

その中でも特に奄美大島の名瀬では、船が港に停泊する間、乗客は船を降りて半日観光した。特産の大島紬工場やハブ飼育所の見学が組まれていた。紬とハブが、大島の代表的な表象として機能していたのである。

再び出航、この延長上に沖縄があり、奄美と沖縄は、パノラマ的な連続性をもって知覚されていた。この点は、

空から二―三時間で一足飛びに点と点をつなぐ形で那覇へ到着する現在の状況とは、全く異なっている。船から伊平屋島や沖繩本島の残波岬を眺めて通過した後、那覇港に到着する。

船の中の琉球

旅行者たちは、船旅で途上の海や島々に出会うだけでなく、実はすでに船内で、琉球そのものを濃密に体感し始めてもいた。阪神地方へ働きに出ていて帰省する沖繩出身の人々が、船に多数乗っていたからである。特に盆前の時期には、船内あちこちに沖繩的な雰囲気がたどよい、泡盛を飲んだ男性が蛇皮線を弾き、歌や踊りが演じられるのを見ることができた。旅行者たちは、沖繩の言葉がわからない歯がゆさを感じながら、到着前から異国情緒をたっぷり味わっていたのである。

もともと、同じ船の中で出会っていても、沖繩からの移住者たちと本土からの旅行者たちでは、移動の前提や背景が全くちがっていたことは、当然のことだが充分留意しておく必要がある。旅行者たちは、経済的にも心理的にも余裕があるから、沖繩へ旅行することができた。対照的に移住者たちは、沖繩での貧困生活を余儀なくされ、死活問題から沖繩を出て、本土へ働きに行っていた。こうした非対称的な力関係にあって別々の道を生きる旅行者と移住者が、阪神―那覇間を行き来する船の中で一時的に出会っていたのである。

船を降りるときの風景――亜熱帯の色彩感覚

那覇港に着いて船を降りた旅行者の目にまず飛び込んでくるのは、民家の赤い屋根瓦であり、樹木の濃い緑とコントラストをなしていた。海の青、屋根瓦の赤、植物の緑や花の赤など、亜熱帯ならではの原色的な色彩感覚

は、旅行者の目に強く訴えかけてくる。

沖縄独特の巨大な白い墳墓や、船で帰ってきた親しい者を迎えて群れをなす人々の沖縄色の強さ、頭に荷物を乗せて裸足のまま歩く女性の姿などは、エキゾチックな所へ来た実感を鮮烈に与えていた。

墓への美的なまなざし

辻原墓地は、那覇港から見える丘陵に広がり、起伏を利用して隙間なく連なっていた。この壮大な墓たちは南国の強い日差しを浴びながら、「死者の家」「死者の街」として琉球ならではの景観を呈し、ツーリストたちからはつねに美的なまなざしを向けられてもいた。昔から住民にとって墓は重要な資産の一部であり、売買や借金の担保にもなること、貧しい自分の家より墓の方が立派であること、洗骨の風習など、墓にまつわるエピソードが、文献からも引用されながら盛んに語られていた。

首里城——琉球王国から日琉同祖の聖地へ

首里城は、旅行者が必ず訪問する代表的な観光地だったが、かなり老朽化していたこともあり、琉球処分により滅びた琉球王国の栄華の寂しき跡が、懐かしい情趣をもって垣間見られていた。また、沖縄県庁が首里でなく那覇に置かれたことで、首里の街そのものが旧都の風情を感じ取られていた。特に昭和十年代、詩人や画家など多くの芸術家たちが首里の王城や月明かりを味わい、作品や紀行文を残している。琉球の歴史・伝統を表す名所として、首里城の他には識名園・崇元寺などの趣が語られている。

実は首里城は、大正期には古びて荒れ放題だったため、取り壊して沖縄神社を建てることが決まっていた。だ

が建築学者・伊東忠太の尽力によって、解体は中止された。伊東は調査を通じて沖縄の石造建築に専門的な評価を与え、琉球の独創的な美を見出しは繰り返しアピールした。その結果、昭和に入って首里城は国から高額の予算を得て修復され、国宝に指定されていくのである（由井、一九七七）。

ところが、その正殿の奥には県社として沖縄神社が建てられ、そこには源為朝・舜天王・尚圓王・尚敬王・尚泰王の五人が祀られた。この五人の意味に注意する必要がある。尚圓・尚敬・尚泰は、琉球王国第二尚氏時代の三人の王である（初代・十三代・末代）。舜天は、琉球王国をずっとさかのぼり、舜天王統の初代の王である。源為朝は滝沢馬琴の物語『椿説弓張月』に登場し、琉球に渡って王国を再建したという話が、伝説として語り継がれている。しかも伝説では、舜天王は為朝の子であったとも語られている。つまり、伝説も活用してこの五人を沖縄神社に祀ることは、琉球王朝の系譜に源為朝を起源として位置づけることであり、日本と琉球が同祖であることを、象徴的に具現化することだったのである。

このように首里城は、莫大な予算を投じて修復されたが、そこでは同時に明らかかな歴史の読みかえが行われ、日琉同祖の聖地として新たに構築され、位置づけなおされていったのである。国家主義の時代に首里城が生き延びる唯一の道だったのかもしれないが、多くのツーリストたちはそのことを特に気づきもせず觀賞・崇拜して通り過ぎ、王国の旧城に違和感なく自明なまま、懐かしいノスタルジアを感じることができたわけである。城内に郷土博物館が設置され観光ルートに入ったことも、後述する郷土意識と国家主義の結びつきの点からして、示唆的である。

ハブの風評

ハブは、沖縄に行ったことのない日本人がもつ沖縄イメージだったようだ。それは確かに「琉球名物の一つ」とされていたが、天敵マングースを輸入してから減少し、山にでも行かない限りまず見なくなつた。観光客は、県の衛生課で飼育しているのをわざわざ見に行っていた。「もう我々の頭は、琉球からハブを取り去ってもよい時代である。」⁽¹³⁾ そう言うほどまでに、ハブのイメージは当時ステレオタイプ化していたわけである。

「琉球へ行くと云ふと蛇に喰はれるなよ、とか沖縄から帰つたと云へばハブにかまれなかつたかい、とか、すぐに人はきく。」⁽¹⁴⁾ この筆者は続いて、「沖縄はひどく非衛生な土地であるかの様に思はれてゐる」ことも指摘し、実際には沖縄はむしろ健康な地だと述べている。彼はこうした風評が、薩摩藩の逆宣伝だったのでと推測するが、その真偽はともかく、「非衛生」に代表されるネガティブで差別的でさえある琉球・沖縄のイメージが、ハブに具現化され、象徴的に表されていたのではないかと、とも推測できるだろう。

貧困

沖縄観光がゆるやかに高まる一九二〇〜三十年代、沖縄は「ソツツ地獄」と言われる極度の貧困にあえいでいた。第一次世界大戦後の反動不況で、主産業の砂糖キビの価格が暴落して不況に陥り、地元の三銀行がすべて破綻するまでに至つた。人口が増大する中で物資は不足し、県民は仕事を求めて県外・海外への移住を余儀なくされた。そんな状況下で、旅行者たちは沖縄へ観光をしに来ていたのだつた。旅を楽しむ一方で、沖縄の貧困や振興策を真剣に考え議論したり、負い目を感じたりする人もいた。特にジャーナリストは、沖縄の貧困の原因は何か、沖縄に果たして振興策は必要か、必要ならいかなる形か、などを正面から論じていたが、しばしば問題の原

因を県民の「怠惰な気質」に帰していた点は、気になるところである¹⁵⁾。

だが、このように沖縄の経済状況を憂いながらも、他方ではそれでも観光を楽しんでしまう両面性は、ツーリストの立場を表している。朝日新聞の社員が言う次の一節は典型的だ。「政治的、社会的、経済的には、一日も早く他府県と伍して見劣りのせぬ沖縄のレヴェルにまで昇つてもらいたい。観光のアトラクションとしては、いつまでも龍宮を連想する美しい琉球であつてほしい。」(下村・飯島、一九三五、一一五) 沖縄の政治・経済・社会の改良・振興を求める現実主義と、古きよき琉球への美的なロマン主義は、ツーリストの意識の中で、かくも都合よく両立してしまうのである。

七、「琉球の女」——沖縄イメージとジェンダー

旅行者たちは沖縄の女性に対して、熱烈な観光のまなざしを注いでいた。ここではジェンダーと密接に関連する、旅行者のまなざしと語りの特徴を整理し、検討しておこう。

「琉球の女」は、炎天下を裸足のまま(「洗足」と言った)頭にものを乗せて、スタスタと歩いていく。この姿が、強く印象に残る沖縄の風景だった。しかも彼女たちは、夏には薄い芭蕉布を着て、見るからに涼しそうだ。

「夏の沖縄女のあの袖の広い帯も締めない解放的な、而も色彩の単純ないかにも軽々しい芭蕉¹⁶⁾」。解放的でシンプルな装いでてきぱき動く沖縄女性に、旅行者たちは素朴な色気と実直な勤勉さを見出しては、目を奪われていた。

さらに旅行者の目を驚かせたのは、中年以上の女性の手の入墨で、電車の中でつり革にぶら下がる目の前の女性の手にそれを見たとき、遠い国に来た感じがしたという¹⁷⁾。

旅の中で受けた沖縄の人たちの温かい人情は、この美しい南国の風土で育ったものだと思われがちだ。そして、ある十代の若い旅人は、沖縄女性特有の「つやのある麗しい結髪」に、こうした人情味や自然美を投影している。「この日本全国何処に行っても見ることの出来ぬ美、今後どうかしてこの結髪を美しい人情と自然の続く限り保存して貰いたいものだ。風俗が一般化して行くと、終にはこの人情美も薄れて行くんじゃないか。現在薄れつつあるんじゃないかと云ふ疑念さへ湧き起つて寂しい気分になる。いやそうじゃない。何処迄も琉球の人達は美しい。」(松田、一九三七、二七四―五) 旅の終わりにこう詠嘆する彼は、南国の美しさと、沖縄女性の黒髪の美しさを重ね合わせている。他府県ではすでに洗練されて失われた、素朴な美しさが、琉球では女性に、人情に、自然に、確かに残っているとす。このエキゾティシズムとノスタルジアの結びつきの中に、ジェンダーの表象は効果的に作用し、南国イメージは女性的なものとして機能している。

糸満

糸満は辻や首里と並んで、旅行者がほぼ必ず観光に行く場所だった。戦後には戦跡参拝の聖地となる糸満だが、戦前は全く文脈がちがいがい、漁村を見に行った。糸満人は沖縄の他の地域にはない、特異な文化・風習をもつと言われていた。特に糸満の女性は、沖縄の女性が一般に小さいのに比べ、体格が立派だとして注目された。⁽¹⁸⁾「糸満の女は体ががっしりとして、その顔立ちがきりっとしまつて、肌の色こそ黒けれ美人が多かつた。」このように観光客は、各地に固有の美人を見つけては喜んでゐる。しかも糸満女性には、貞節や堅実さを見てとろうとした。糸満の夫婦は互いに独立経済で、妻は漁夫の夫が獲った魚を買い、それを売って得た収入を自分の財産にしているという特有の制度が繰り返し語られるが、これも糸満女性がしつかり者であることを表すエピソードになっている

る。

「男逸女勞」Ⅱ男は怠け者で女は働き者である、という沖縄の典型的なイメージは、すでに前近代の文献に記録されていた(本山、一九二五、七八―八三)。糸満女性は、「働く琉球女」のイメージを、典型的・代表的に表す存在として位置づけられていたのである。

辻

戦前の琉球・沖縄イメージに決定的な役割を果たしていたのは、辻の女性たちである。辻は、多い時期は三千人もの女性がいたと言われる、いわゆる遊里であったが、当時の沖縄では教育家・実業家・宗教家・政治家など、どんな人たちでも辻で宴会を行い、琉球の伝統的な料理と歌・踊りが提供される、総合的な文化・芸能の場として社会的に認められてもいた。団体の旅行者もたいてい初日の夕食には辻で歓迎を受けた。沖縄を訪れる者なら、辻の町の情緒を味わわない者はまずいなかったという。

とはいえ実際、女性との性的な関係を求めて辻に通った旅行者も、少なからずいた。例えば、第三回沖縄視察団の感想座談会で、ある人はこう言っている。「僕の事を○○辻男なんて云ふ人がありますが弁解は致しますまい。(哄笑)辻については先輩も多いことですから辻談義も此の際控えて置きませう。(拍手)」この語りのノリや笑い、拍手からは、辻通いが男たちの沖縄旅行の楽しみの一つとして共有されていた雰囲気伝わってくる。

沖繩へ五回フィールドワークの旅をした社会学者・河村只雄は、五回目の時に「観光団」と旅館で一緒になったが、よい部屋を占領した団体が、夜ほとんど部屋に戻らず、「辻の別荘」に二重払いで出かけていたというエピソードを語っている。朝方帰ってきた客に、旅館の女中は「おのろけ門限箱」を差し出し、「御献金を願います」

とユーモラスに求め、客たちは苦笑しながらお金を入れたという。河村はこうした団体観光客のありさまを見て、好ましくないと批判している。「首里・那覇をちよつとのぞいて『辻の別荘』に二、三泊しただけで、一かどの『琉球通』になったように思っていると、とんでもない間違いだである。私は琉球文化の特徴は首里・那覇にはあまり残っていないで、国頭とか、また不便な離島に行つて初めて、これを求め得るような気がする。」(河村、一九一九、三三三―三五)

河村は、辻通いをして琉球を知った気になる団体客の連中に憤りを感じ、琉球への関わり方が肉欲へ特化し完結する、その表層性・一面性の全く対極に、フィールドワーカーとしての自分を位置づけていた。「より高度な」ツーリストが他のツーリストを批判・揶揄し、自分を彼らと差異化して位置づけるまなざしと語りは、当時から行われていたのである。

女護が島

すでに地理学者・神田孝治が明確に指摘していることだが(神田、二〇〇四)、本稿でも辻との関連で、女護が島について言及しておきたい。女護が島とは、直接には沖縄県の最西端の与那国島のことを指す。有名な昔話で、この島に船が着くと、女性たちが自分の草履を並べて待つており、客が履いた草履の主の女性が、客を厚くもてなしたという話である。明治期の笹森儀助の『南嶋探験』には、実際に与那国島へ行つたときにこれに近い風習に出会つたかのような記述がされており、これを読んだツーリストたちは、南島・沖縄というと、まことしやかに女護が島を想像していたのである。ある旅人は、友人に琉球へ行くと言うと、草履の話を持ち出され、「帰つて来れなくなるぞ」とからかわれてしまう。そんな話は現代に通用しないと頭ではわかつていても、「それでもその

話によって、まだ見ぬ琉球国といふものに対する僕の旅情が、前にも増して一段と煽られた」のであった。⁽²⁰⁾

もつとも、与那国島そのものへは、交通の便が悪いため到底ツーリストが行くことはできない。彼らが実際に行ったのは沖縄本島であり、那覇の辻であった。そうして、イメージの女護が島を、現実の辻に投影する。「尾類子と称する妓^{うななめ}達が、約三千人から居ると云ふのを聞いても、この一廓が女護ヶ島であることが分る。」「そこは全部女人ばかりで、男性は一人も居ない。上は楼主から、下は雑役方に至る迄、全くの女護ヶ島である。⁽²¹⁾」こうして、女護が島の伝説は現実的な準拠粹として機能し、ツーリストたちの辻通いと、辻の女性たちの商売を実際に促していたのであった。

八、ツーリズムの粹組みの構築——知識人・文化人の相互作用

以上のようにピックアップしてきた、戦前期の観光のなかの代表的な沖縄イメージは、驚くほどに定型化されていて、ツーリストたちの風景の見方や体験・解釈の仕方は、かなり似通って均質化されている。特に戦前の沖縄観光の終わり頃、昭和十二年に観光視察団が始まった時期には、沖縄観光において名所を回るモデルコースや、各地にまつわる伝説や知識の語り方が、ほぼ体系的に確立されていた。そうしたツーリズムの粹組みは例えば、実際に数多くの案内役を務め、実に博学で知られ影響力の大きかった地元の教育者・郷土研究家の島袋源一郎が、繰り返し観光客に語り伝えた膨大な知識を著書にまとめた『新版沖縄案内』（昭和七年）や『琉球百話』（昭和十六年）に、百科全書的に収められていった。後者の出版は、太平洋戦争に入り観光が途絶えていく時期と重なったが、前者は重版を繰り返しており、この時期の観光客に多く参照されたことは確実である。すでに戦前期の時

点で、沖縄への観光のまなざしは、集合的に構造化されていたのである。

このような、観光において公式的に〈沖縄〉〈琉球〉を観る／語る際の知のフレームは、いかにして形成され、確立されていったか。これを検討するには、沖縄観光がよりマス化されていく前の段階に、焦点を当ててみる必要がある。

(二) 沖縄学と沖縄イメージ——アカデミズムとツーリズムの節合

先に示した表1を再び参照してみよう。戦前期沖縄への旅行記や観光ガイドブックを書いた人たちの多くを占めるのは、学者・教員・ジャーナリスト・芸術家など、知識人・文化人であり、いわば文化的なエリートの立場にある人たちであった。当時のツーリストは、自分が文を書く際にも、このような先人たちの旅行記やガイドブック、沖縄関連本からしばしば引用をし、その影響下で旅をしている。もちろん現場での案内人の語りも、知覚や解釈を大きく方向づけている。ツーリストが沖縄を観る／知る／語る際に準拠する知のフレームは、少しずつ歴史的に積み上げられ、構造化されてきたわけである。

もつとも、学者やジャーナリストが多いからといって、彼らが先駆的に積み上げた沖縄観光の知の体系は、自分の目で直接観察して確かめた「客観的・実証的な事実」だけで構成されているわけではない。むしろ、沖縄の地元で昔から口伝えされてきた伝説・物語や、身体化された歌・踊りなどの伝統芸能や行事に表現された表象の世界を見聞きして書きとめたものが、かなりのウェイトを占めている。しかもそれらの主観的な表象世界は、決して単なる作りもののフィクションとして完結するものではない。地元の人たちの生活の基礎として現実的な力をもってきたゆえに、ツーリストたちが沖縄の個々の名所を観たり解釈したりする際の、現実的で公式的なフレー

ムを実際に形づくってもいくのである。

そして、このような地元の人々の生活に根づいた伝説や芸能などを対象としてきたのが、まさに柳田國男が立ち上げ確立した民俗学的な知でもあった。実際柳田は、『海南小記』の旅以来、沖縄を日本民俗学の拠点として神聖化していくわけだが、彼自身、自らが一介の旅人であることを自認してもいた。つまり、まさに大正十(一九二一)年の柳田の沖縄旅行において、沖縄をめぐるツーリズムとアカデミズムは節合されていく。その際は、伊波普猷や島袋源一郎、比嘉春潮ら沖縄の郷土研究者たちとの相互作用の中から周到綿密に知識を取り入れ、南島研究への視点を築き上げていく。

そして、彼のこの来沖を契機に、周囲の文化人・知識人が多数沖縄を訪問し、一九二〇年代には南島研究ブームが高まっている。しかも同時にそれは、地元沖縄出身・在住の文化人・知識人をも巻き込むものであった。伊波普猷をはじめ、沖縄出身・在住の人たちによる郷土研究が、柳田によって積極的に奨励され、柳田を通じて東京の出版社から次々に本が出版されていく。いわゆる「沖縄学」がこの時期活発化していくのは、柳田のお墨つき、権威づけに負うところが大きい。ナショナルな日本民俗学とローカルな郷土研究は、相互に補完し、強化し合っていくのもあった。

この時期の沖縄研究と沖縄観光、沖縄学と沖縄イメージは、密接に結びついている。明治以降に確立された近代の学問体系の活動の一環として、沖縄に来る諸学の研究者たちは、その仕事のためであれ、自らツーリストとして沖縄に来ているのもあった。またその上、彼らが学問的・公式的に画定した沖縄の諸特徴はそれ自体、以後の沖縄イメージの一要素として、沖縄観光の枠組みを形づくっていくことにもなるのである。

ここで重要になるのが、彼らを沖縄で案内した、島袋源一郎や伊波普猷らをはじめとする、沖縄側のインフォー

マントたちの存在である。彼らこそが、研究者やアーティストを沖縄で案内し、風景・名所を見て回りながら知識や物語を伝達した。客たちは、その見聞きしたことをもとに、沖縄に関する研究をまとめ、作品を形にしたのである。すなわち、こうしたツーリストたちが立ち上げた沖縄イメージには最初から、地元インフォーマントの知識や発想が組み入れられていた。沖縄の内と外の視点が相互に作用し、媒介しあう中で、沖縄に関する公式的な知やイメージは立ち上げられたのであった。そこに形成されてくるのは、本土側の南島研究と沖縄側の郷土研究が、互いに織り重なり合う事態であり、またこの時期の沖縄学と沖縄イメージの立ち上げが、同時並行で進んでいく事態であった。したがってこの状況をとらえるためには、観光社会学の視点に、知識社会学の視点を重ね合わせて見ていくことが必要である。

よってここではまず、柳田國男の沖縄への旅について、より詳しく検討しておくことにしよう。柳田が沖縄へ行くに当たって、決定的な影響を受けていた先人に、笹森儀助がいる。この先駆的な二人のツーリストを見ていくことにしよう。

(二) 柳田國男の沖縄旅行——一九二十年代の南島ブーム

明治二六（一八九三）年、青森の元役人・実業家であった笹森儀助が決死の船旅で奄美・沖縄の南島を回り、『南嶋探險』を著したのは、国力増強・国境防衛を模索する、ナショナルな危機意識と使命感からだった。「探險」とは大げさに聞こえるが、当時の南島はハブとマリアの脅威にさらされていた。その島々を笹森は恐れず半年かけて歩き回り、人々の貧困の実情をつぶさに見て記録した。彼が特に注視して憤り、改善を訴えたのは、宮古・八重山の先島諸島に残された人頭税の旧慣のもと、人々が貧困や疫病にあえぐ姿だった。

笹森の『南嶋探験』は、庶民の生活を生き生きと詳細に記述しており資料価値も高く、のちの南嶋研究の系譜に大きな影響を与えていく。柳田國男が沖繩に特別な関心と思い入れを抱くのも、この『南嶋探験』を読んで衝撃を受けたのが始まりだった。大正十(一九二一)年に自ら沖繩へ渡ることになる柳田は、交通も未発達な時期に島々を踏査した笹森の行動力と志の高さを称え、自分を含め『南嶋探験』の熱心な読者たちが、南嶋研究に向かったことを指摘している。⁽²⁴⁾「知識を愛する者の旅行熱は、之によって大いに促されて居る。」笹森自身は学問を志向していないが、この本が南島・沖繩研究を活性化し、柳田たちの旅への意欲をかき立てたことは確かである。

柳田が笹森に見たのは、現地へ行って直接自分の目で観察し、生の声を聞くフィールドワークへの志向性であった。柳田は、「事実を直視」する笹森の営みに、「観察実験の学」としての「文化科学」の基礎を見出していた。他方で、『南嶋探験』を読んだ明治四十(一九〇七)年当時、柳田は農政官僚として、農民の生産力と生活の向上に取り組んでいた。その彼が、笹森による沖繩庶民の貧困状況の報告に強くひかれ、関心を高めていくのは、自然な流れであった。「経世済民の学」としてのアクチュアルな問題意識に突き動かされ、柳田も沖繩へ旅に出る。そして彼も笹森と同様、先島(宮古・八重山)の状況に特に目を向けた。そこでは沖繩の問題や矛盾が、より色濃く表れていたからである。沖繩は近代日本の辺境であると同時に、先島はさらにその沖繩の辺境でもあった。⁽²⁵⁾

『南嶋探験』と並んで、柳田が沖繩に関心を抱くに至るも一つの契機は、明治四五(一九一二)年、沖繩在住の伊波普猷から著書『古琉球』を送ってもらったことである。柳田の沖繩へのまなざしは、笹森の外からの視点と、伊波の地元からの視点の両方から形成された。柳田は伊波と手紙で交流を重ねる中で、沖繩への関心を深めていく。柳田が伊波から影響を受けたのは、伊波の日琉同祖論であり、家族・信仰・言語など、日本文化の原

型をとどめる沖縄文化、という視点であった。そこから柳田は、日本文化の原型として沖縄をイメージするようになる。「原日本を映し出す鏡としての沖縄」という位置づけであり、それこそが柳田による〈沖縄〉の発見であった。「我々の学問にとって、沖縄の発見といふことは画期的の大事件であった。」

柳田の説では、中央に近い地域ほど文化は急速に変化し、距離が遠くなるほど変化の速度はゆるやかになる。孤立した島のような場所ではなお、古い文化は変わらぬ姿を残す。だから、「以前はただの空想であった我々の仮定説に、かなりの支援を与へる事実が当然として彼地には行はれて居た」沖縄を発見したことは、柳田民俗学の実証的な立脚点として、非常に重要な契機となったのである。⁽²⁶⁾

もつとも、すでに多くの論者が指摘するように、⁽²⁷⁾このような柳田の一国民俗学の視座は今日、当時の国民国家統合、文化的ナショナルリズム、単一民族神話の論理を含んでいたとして、厳しく批判されてきている。沖縄の個別ローカルな文化を見ても、結局はそこに日本全体のナショナルな普遍性を読みとり、沖縄を日本の枠組みに回収してしまう志向性が、当時の柳田には確かにあった。明治十二年の琉球処分以来、わずか数十年の日本化・近代化の経緯に沖縄がおかれた歴史的な特殊性・政治性や、より長年来の他国・他地域と沖縄との間にあった密な結びつきの歴史を問わずに、沖縄・南島を日本の一国民俗学の体系の中に組み込んでしまう作業を、柳田は行っていた。笹森から得た経世済民の学の沖縄への実践的適用と、伊波から得た日本文化の原型としての沖縄、という二つの方向は合体して、柳田民俗学というアカデミズムの形をとる。だがそれは同時に、文化的ナショナルリズムの表現でもあり、さらに明白な意図はたとえなくとも、民俗学的知の体系の中に、沖縄への隠れたコロニアリズムを含み込んでいた側面は否めない。大正十年の柳田の南島発見の旅は、沖縄にむしろ〈日本〉を発見する旅であり、一国民俗学の拠点を打ち立てる旅でもあった。

そして、こうした柳田の沖縄旅行の社会的影響は大きく、多方面に沖縄への関心を呼び起こしていく。その沖縄旅行は「海南小記」として東京朝日新聞に三十二回にわたって連載され、後に単行本化された。また柳田は沖縄から帰るとすぐ、折口信夫に沖縄のことを話すと、折口もひきつけられて早速、沖縄へ旅に出た。二度の旅をもとに、折口もいくつかの沖縄論を書いている。

さらに柳田は、南島談話会という会をたびたび開き、南島・沖縄に関心をもつ知識人たちが集まる場をもってゐる。この談話会は第一期、第二期、第三期に分けられるが、南島研究の中核組織として発展するにつれて、本土出身の研究者中心から南島出身の郷土研究者中心へ、担い手が移っていく点は興味深い。「南島」とはあくまで日本本土のポジションから見た、外からのツーリスト的な視点だったわけだが、柳田が切りひらいた南島研究のトポスが醸成するにつれて、地元側が自ら「南島」を主体化し、南島研究を郷土研究として引き受けていく流れができていくのである。柳田は大正十一年、東京の出版社から『炉辺叢書』を刊行するが、伊波普猷『古琉球の政治』や佐喜真興英『南島説話』をはじめ、全三十六冊中八冊が、沖縄の研究者たちによる南島に関する著作であった。また、柳田が関係した雑誌『民族』『旅と伝説』にもこの時期、地元民の南島研究が多数掲載された。このように、柳田の沖縄への旅は、大正末期から昭和初期にかけて、南島研究ブームを一気に呼び起こす契機となったのである。²⁸⁾

柳田ら中央の研究者による一国民俗学と、地元研究者による郷土研究とは、相互補完的に作用しあう関係にあった。柳田が、異民族・異文化を扱うエスノロジー＝民族学と差異化する形で、フォークロア＝民俗学を固有の独立したディシプリンとして立ち上げるとき、地元民の内側からの自発的な郷土理解という要素は不可欠であった。かくして、柳田らの文化的ナショナルリズムと、伊波らの地元沖縄への郷土愛とは、相互に補完し強化しあう役割

を果たすことになった。

(三) 島袋源一郎の仕事——国家主義の時代の中で

先にもふれたが、柳田ら中央の知識人・文化人の沖縄旅行の案内役をつとめた地元的人物に、島袋源一郎がいる。この時期の沖縄側の知識人といえば、沖縄学の祖・伊波普猷が突出して有名だが、観光の文脈ではむしろ、島袋こそ欠かせないキーパーソンである。

昭和十年、朝日新聞社の下村海南・飯島曼史が沖縄を旅行して書いた『南遊記』にも、島袋は案内人としてたびたび登場している。その物知りぶりに下村たちは驚嘆し、絶賛している。「微に入り細を穿ちて、立板に雨のやうな弁を揮ふ。この人、およそ琉球のこと、古今東西を貫き雅俗硬軟を通じて知らずといふことなし。僕は心ひそかに琉球雑学博士島袋圓齋先生の尊称を奉ることにした。圓齋はいふまでもなくエンサイクロペディアである。」(下村・飯島、一九三五、一二九)まさに沖縄の生き字引だった。例えば同行中の車内で、歴史的な偉人の蔡温の話題になると、島袋は事細かにその功績を語り続ける。「この松並木は、この森林は、この道路は、この港湾は、この水利事業は、この部落の移転は、この何は、この何はと、オール蔡温デーといふ調子で、ノベツ幕無しに説明がつづく。」その上、「更に余技として宴に臨みてはソプラノ式の歌謡をうたひ蛇皮線を弾ず」芸達者な面も見せると、旅人たちに敬意をもって畏れられたのだった(同、一五一—一四)。

ここで重要なのは、沖縄の偉人・蔡温の例に典型的なように、島袋のこうした博覧強記ぶりに見られる郷土沖縄への思い入れの強さが、一体どこから来るのかという点である。

先述したように島袋は、観光関連の本では『新版沖縄案内』と『琉球百話』を書いている。前者は文字どおり

沖繩案内の本であり、後者も、島袋の詳しい案内の恩恵を受けた研究者が、あなたの知っている琉球の話を百種まとめて出版したらどうか、と注文した結果できた本だった(島袋、一九四一、自序)。まさに観光ガイドの達人・島袋のなせる業だが、同時にこれらの本は、沖繩県内向けに書かれてもいた。

『新版沖繩案内』の緒言で、彼はこう書いている。「一般の人々に対する単なる案内書のみならず、夫々専門の立場より視察調査せんとする人士にとりても参考資料を提供すべく起稿したのである。故に県外よりの来訪客は勿論県内各方面に活動せる人々にとりても沖繩研究の伴侶たるを失はない。」(島袋、一九三二、一)『琉球百話』でも、友人の島袋全発は序で、「主として県外来訪客の便に備ふるために執筆されたものではあるが、一般県民にとつても恰好の郷土読本であり、肩の凝らぬ趣味的伴侶であつて、年少子弟を啓蒙する資料も決して少なくない」と述べている(島袋、一九四一、序)。

実は、話術巧みな観光案内人を演じる島袋の本職は、教育者であり、郷土研究家であつた。沖繩本島北部の国頭郡に生まれた島袋は、小学校の教員になり、驚くことに二十六歳で校長に抜きされている。学校経営で成果を挙げ、若くして県教育界の注目を集め、エリートコースを突き進んでいた。また彼は三十代前半、『国頭郡誌』の執筆依頼を受け、詳細な調査により四百五十ページもの大著を書き上げ、高い評価を受けている(大正八年刊行)。大正九年、県の社会教育主事として那覇に移り、県の中央から教育の行政と現場をつなぎ、社会教育にも精力を注ぐ²⁹。彼は、県民の教育に情熱を傾ける文化エリートなのであつた。

ちようどこの時期、沖繩旅行中の柳田と彼が会うのは、大正十年のことだつた。柳田との出会いを契機に、中央知識人たちのツーリズムと民俗学的まなざしによって南島研究ブームを迎え、外から新たに価値と正統性を与えられた沖繩の郷土文化に、島袋が研究と教育の志をより強めたであろうことは、伊波普猷と同様であり、想像に

難くない。

ところで、歴史学者・高良倉吉は、一九七六年発行の『新沖縄文学』三三三号の島袋源一郎論で、島袋の研究が国家主義と天皇制イデオロギーを色濃く反映していたことを指摘し、痛烈に批判している(高良、一九七六)。島袋は国頭時代、国頭郡青年会の幹事をつとめていた。この青年会は、教育勅語と戊辰詔書といった、国家主導の思想・道徳教育の方針に依拠して活動していた。この時期の地方改良運動の一環であり、帝国の上からの発展強化を、地域住民の草の根意識のレベルで下から補強していく役割を担っていた。

時期を同じくして島袋は、依頼を受けて国頭郡誌を執筆する。その大正期は、郷土史誌の編纂が活発化する時期で、郷土史の知識の普及を、国民教育と調和させることがねらいとされた。地方の農村に残る伝説や史跡などを掘り起こし、郷土の伝統文化を再評価することが、天皇制国家の「国を愛する」イデオロギー的要請ともつなげられていく。郷土教育を媒介した国民教育、愛郷心を媒介した愛国心が、目指されていたのである。

島袋は、沖縄神社や名護神社などの神社の創立にも貢献した上、郷土博物館の創立にも尽力し、開館後は館長も務めている。さらに昭和十二年の改姓運動でも(例えば「かなぐすく」↓「きんじょう」)、島袋は運動の発案者であり主唱者であったという。こうした一連の活動の延長上に、中央知識人たちの観光ガイドとして熱弁をふるう島袋の一面もあり、先述の『沖縄案内』『琉球百話』に加え、『沖縄善行美談』『沖縄歴史』などの著書もあつたわけである。高良が指摘するように、島袋が鮮やかに描き出す「郷土」＝沖縄が、大いなる天皇制イデオロギーの中に吞み込まれ従属しており、沖縄人が「大和民族の一分団」として機能させられていたこと、また島袋がそれを自覚的に行っていたことは確実である。

とはいえ、である。誤解を恐れずに言えば、大正～昭和初期の強力な国家主義の流れを考えれば、そのように

指摘される島袋の一連の活動にはそれほど意外性はなく、十分に歴史的な必然性の中にあつたようにも見えてくる。当時すでに強力な言論・思想統制が働いていたことを思えば、高良倉吉がその研究態度を後世の文脈と立場から一見ラディカルに告発していることの方が、むしろ滑稽であるようにも思われてくるのである。⁽³⁰⁾

したがって、ここで押さえておきたいのは、そのような帝国・中央への圧倒的な従属を強いられる時代の文脈の中にあつて、伊波普猷が苦心して沖繩学を確立したのと同様に、島袋がいかなる沖繩像を立ち上げ、それを觀光と郷土の両方の文脈で、県内外に広めようとしたのか、ということである。

(四) 沖繩と琉球——リアリティの二重性

『新版沖繩案内』の第一章・総説(島袋、一九三二、一一—十四)は、「龍宮と琉球」の話から始まる。有名なおとぎ話の龍宮城の世界が、琉球の王城や祭りに似ている。「幼い時に聞いたこのお話は一度琉球を訪ねて見たいといふ好奇心をそそらずにはおくまい。次に馬琴の弓張月を読むと、誰でも昔鎮西八郎為朝が弓杖ついた土地、而して其の子舜天丸が王統を垂れたといふ、海南のユートピア、琉球を訪ねて見たいといふ欲求が起る。」龍宮城に、滝沢馬琴の『椿説弓張月』に出てくる琉球イメージを重ね、「海南のユートピア」へのロマンをかきたてる。⁽³¹⁾

島袋は、県外の読者が琉球を持つ、ごく限られたプラスの先入観を呼び起こしながら、同時にマイナスの先入観については、その誤りを戒める。「未だ沖繩の土地を踏んで見ない人は前のお伽噺などを聞いて琉球といつたら全く異国であつたかの様な先入観念に捉はれてゐるのが多い。今でもチョン髻に広袖寛袍の人々が沢山市中を徘徊してゐたり、男逸女労などといふ飛んでもない沖繩観を持つたり、非道い人になると植民地視する黴の生えた頭を持って来る仁も稀にはある。」こうした先入観や偏見に対して彼は、沖繩は昔かられっきとした日本である

ことを強調する。遣唐使や平家が沖縄に漂着した伝説も活用し、中国との関係については「何等民族的繋がりはない」と言い切る。島袋にとって絶対には許されないのは、沖縄がいくら独特の南国情緒をたたえているからといって、台湾・満州・朝鮮といった「植民地」「外地」と同一視されてしまうことであつた。⁽³²⁾

これと関連して重要なのは、沖縄と琉球という、呼称のちがいの説明である。「他所では琉球といつた方が通じが早いけれど当地では沖縄といはねばならぬ。それは沖縄は和名で古くからの名称であり、琉球は唐名で後についた名前だからであらう。(中略)言語感情は妙なもので土地の人は『沖縄』と呼ばれると如何にも親み深く感じ、『琉球』といはれると何だか侮辱されたやうに思ふ。沖縄人とか琉球人とかいふ言葉は何だか民族的名称の様に聞えるから絶対に使はない。又沖縄県に対比して本土を『内地』といふ場合もあるが之は植民地に対する合言葉の様に聞え、県民の自尊心を傷ける所から使用するを避け『他府県』と呼ぶ方がよい。」

島袋のこうした「沖縄」と「琉球」の使い分けは、ツーリストと地元民の二つのまなざしを巧妙に使い分ける、島袋自身が身につけたダブルスタンダードの作法を表している。龍宮の比喻から琉球の魅力ツーリスト向けに濃密に語っておきながら、ひとたび沖縄に来たら、琉球でなく沖縄と言わねばならぬ、とも言つて。「琉球」や「内地」という言葉を使えば、沖縄が日本でない別の国・民族であるかのように感じさせ、県民の自尊心を傷つけかねない。「沖縄」「他府県」と言うべきとし、全国の府県と同じ立場の沖縄県であることを強調する。つまり、この場合の島袋にとつての沖縄とはあくまで、明治十二(一八七九)年の琉球処分・沖縄県設置以降に浸透したりアリティであり、すでに昭和のこの時期にあつては、それこそが至高の現実とされているわけである。

しかし同時に、それ以前の「琉球」は封印されてしまふわけでもない。首里城に代表されるように、観光の対象としてツーリスト向けに形を変えながら新たにイメージ化され、ツーリストを通してそのイメージは強化され

ていく。また並行して地元にとつても、保存すべき郷土の文化財としての意味づけを担っていく。このもう一つのリアリティ、「琉球」のリアリティを演出していたのも、まさに他ならぬ島袋なのであった。すなわち、ここに島袋源一郎が体現していたのは、沖繩／琉球、生活／観光、地元民／ツーリストにおいて、リアリティの二重性が並立する事態であった。

したがって、国家主義の大いなる時流を所与とし、そこから圧倒的に規定されつつも、『新版沖繩案内』『琉球百話』の島袋の仕事に見出すべき核心は、むしろ別の点にあったとも言えよう。ツーリストの外からのまなざしに媒介されながら、そのまなざしを一定方向に操ることで得られるような、沖繩側のアイデンティティを構築する作業である。ポジティブな先入観を増長・画定しながら、ネガティブな先入観の誤りを正し、切り縮めるような形で沖繩イメージを描き出すことは、知識の限られたツーリストに対する案内人の立場であればこそ、比較的自由にできる作業であった。しかも、ツーリスト向けに語りながら、実際にはこれらの本を県民の郷土教育にも使うことで、こうした沖繩イメージを県内にも広め、沖繩への自負や誇りを持たせる方向にもつながっていくのであった。島袋において、観光案内と郷土教育、県外向けと県内向けの二つの仕事は、根底において一つにつながっていた。だから、ツーリスト向けに沖繩イメージを大げさなまでに演出しアピールしていくことは、郷土愛の観点からも、島袋の中では矛盾することがない。彼がいかに沖繩イメージをポジティブに演出していたか、もう少し具体的に見ておこう。

沖繩名物としては、固有の動植物を列挙し、特に暖流の影響で独特の色彩を放つ貝類を挙げる。台風も名物に挙げるが、通過すれば涼しくなり、被害はあっても復活も早い。特産物の黒糖・泡盛、織物・漆器・陶器の質のよさも紹介し、このような沖繩が、近年学者たちによって「古代日本研究の一博物館」として、価値を認識され

てきている、と言う。

また、鹿児島から沖縄への船旅の際の航路や風景の見え方も、リアルに解説している。「此の航路で最も驚くのは青空の色が如何にも美しく輝いてゐるのと、琉球群島の岸を洗つて流るる黒潮が紺碧藍の如く、しかも南へ南へと進むにつれて一入鮮かになつて行くことである。」「千変万化窮りなく全く想像に絶する南国の奇観」「此の偉大なる自然の大技巧、驚くべき神秘の大芸術」など、南国の海の素晴らしさを絶賛している。やがて沖縄本島の風光明媚が見えてきて、残波岬、海岸の珊瑚礁、丘にそびえる首里城の正殿などが次々に眺望されていく。

島袋は明らかに、本土ツーリストのまなざしを内面化した形で、沖縄を美的に描き出している。沖縄が貧困に苦しむ暗い時代にあつて、彼がここまでポジティブな沖縄イメージを演出して語れたのは、その対象をツーリストに設定していればこそだろう。こうした沖縄への観光のまなざしを言説化して確立するとともに、そうした外からのまなざしを内側にはね返らせ、地元民が郷土を見て愛するまなざしの確立にも活用していく作業が、彼においては同時に行われていたのであった。

(五) ツーリズムと方言論争

昭和期に入ってから沖縄へのツーリストには、柳宗悦率いる日本民芸協会の一行もいた。彼らが引き起こした有名な方言論争は、すでに多くの論者が取り上げているが、本論では観光の視点から、あらためてこの論争をとらえ返しておきたい。昭和十五(一九四〇)年一月七日に那覇市公会堂で、訪沖中の柳らが呼び起こした沖縄方言論争は、実際には沖縄観光協会と郷土協会が主催する、観光を主なテーマにした座談会の場で起こっていたのである。しかも、このときの旅行団二十六名の中には、民芸協会の同人以外にも、販売事務・写真・映画など

に加え、国際観光局や日本旅行協会（ジャパン・ツーリスト・ビューロー、現在のJTB）から来た、本土で観光事業に従事する人物も入っていた。つまり、彼らの旅は民芸運動と同時に、沖縄に観光の価値を見出し、より高めようとする側面を持ち合わせていたのである。彼らにおいて民芸と観光は、密接に結びついていた。

ではなぜ、民芸ではなく観光を主に語るこの座談会の場で、方言論争が起こったのか。それはおそらく、沖縄観光としてみれば必然的な結果であつただろう。なぜならその後、復帰後や現在に至るまで繰り返し、沖縄観光をめぐる常に県民の中に立ち上ってくる、身体的な違和感や揶揄の意識が、すでにこの座談会とその後の論争に、典型的かつ先取的に噴き出してきていたからである。簡潔ながら、論争の展開を具体的にたどってみよう。

座談会の進行については、式場隆三郎による手記がある³⁴。主催者から意見を求められた座長・柳宗悦は、「観光の立場からもつと積極的の活動をして、この素晴らしい土地を世界的のものとしたい」との旨を表明した。次に国際観光局の水沢澄夫が、沖縄を観光地として視察した所感を述べ、道路の舗装、ホテルの増設、美しい伝統建築や自然の風景の保存、標準語励行ポスターの行きすぎの自粛、首里城のコンクリートの柵や万座毛の鳥居を禁止すべきことなどを要望した。続いてツーリスト・ビューローの井上昇三は、沖縄がまだ全国で充分に紹介されていないことを指摘し、航路拡大と旅客誘致、観光地域の設定や県内交通の充実が急務と述べた。医者で評論家の式場隆三郎は、観光パンフレットの普及を求め、沖縄の墓の美しさに驚嘆した経験から破壊に反対し、同様に「日本でも美しく、古格のある沖縄の方言」も、標準語奨励にかかわらず保存すべきことを説いた。さらに陶芸家・浜田庄司は、「この前に来た時に移転を希望して置いた崇元寺門前の目障りな電柱がまだ依然としてそのまま」になつていると言ひ、「首里へ入る所のモダンな自動車ガレージ」が風致を害しているなど、こうした問題への観光協会の尽力を求めた。

この発言はさすがに、怒りの引き金を引いたようだ。浜田の指摘に対して電気会社の側は、物資や技術の制約上困難であることを答えながら、「この前にすぐ取ると約束をした覚えはない」「あなたから命令されるやうな口調で云われるのは心外だ」など、感情的な言葉を付け加えた。続いて山内警察部長は県の立場を代表して、標準語運動は急務であると口火を切った。「観光客が一時的に興味から方言をよろこび、それを保存しろなどと云はれては困る」。墓にしても、費用や衛生の面からも改善の必要があり、文化的な趣味で言われる意見をそのまま認めるわけにはいかない旨を返した。

対して柳は、標準語奨励が県民に卑下の感覚を与え、有害でさえあると指摘した。標準語は必要だが、沖縄語は日本の中でもすぐれた言葉であり、残すべきだと主張する。再び山内は、沖縄には他県とちがう特殊事情があり、標準語を徹底させねばならないことを強調した。こうした応酬がしばらく交わされた後、論争は他の論者にも広がり、平行線をたどったまま終わった。

論争はさらに拡大する。翌八日の琉球新報・沖縄朝日・沖縄日報の地元三紙に、一斉にこの論争が大見出しで報道されたのである。とりわけ標準語と方言の問題ばかりがクローズアップされたため、県民の関心と怒りを呼び覚まし、社会問題へと発展していく。連日この問題に関して、新聞の記事や投書で激しいやりとりが続く。

十日、沖縄朝日に県学務部・吉田剛延の論評「愛玩県」が掲載された。「彼等の云ふ所はいつもかうだ。『わざわざ遠くまでやつて来たのだから奇らしいもの面白いものを残して貰はないと困る』彼等は余りにも県をその好奇心の対象にしてしまつてゐる。好奇心の対象にする位ならまだしもである。もつとひどいものになると観賞用植物若くは愛玩用動物位にしか思つてゐないものもある。かかる人々に限つて常に沖縄礼讃を無暗に放送しては『またか』と思はせられるのである。」(谷川編、一九七〇、十一—十二)

この吉田の発言は、実に痛烈なツリリスト批判となっている。それは、柳ら民芸協会を超えて、この時期すでに活発に沖繩へ来るようになったツリリスト一般の表層的な態度へ向けての、身体感覚レベルでの違和感や拒絶感、憤りの本音を爆発させたものであった。そして、後に続く投書にも同様のものが続くことを考え合わせれば、柳たちのように外から来て沖繩についていろいろ発言して帰るようなツリリスト知識人・文化人に対して、県民が少なからず抱く感情を、吉田はある程度言い当て、代弁していたとも言えよう。

月刊民芸編輯部の田中俊雄は、「問題の推移」を整理して伝える中で、吉田にこう応答する。「それはいままでの沖繩をおとづれる、いはゆる旅行者の態度が吉田氏のいふやうに、いかにこの沖繩を単なる好奇の対象としてのみ眺めてみたか、われわれは想像するにたたくない。」だが、「沖繩のかかる文化人と称する一部の人は、他からくる外来者がこの沖繩をあまりにも珍奇なものとして玩弄しすぎるといつて非難するが、逆にさういふ沖繩の文化人自身があまりにも他からくる外来者を珍しがりはしないか。」(同、十二) 沖繩を好奇の対象として珍しがるだけの旅行者の態度に違和感を抱くのは理解できるが、沖繩の文化人たちの方も、外来者を好奇の目で珍しがっているのではないかとやり返す。大さわざして接待し、チャホヤするのが「無節操」だと、ツリリストの立場からの違和感を伝え返す。

吉田の「愛玩県」に続いて、論争はさらに、十一日の沖繩県学務部の声明書の発表と、それに対する柳の応答へと発展していく。だが、本論の文脈で観光と関連する発言は、十三日の沖繩日報に掲載された投書、大宜味梅子「お偉い方々へ」である。「近年他県よりお偉い方々が御越しなされて種々の方面を啓発して下さることは有難いことで御座います。」「然し私達は貴方達の褒めて下さる御言葉に対し心から御礼を申し上げることの出来ないのはほんとに残念なことで御座います。貴方達は『少し遠いけれども沖繩は面白そうだ、辻と云ふ一寸変わった遊

郭があるそうだが行つてみようか』位のところでおいでになることだと思ひます、そして本県に対して軽いお気持ちで、ほんとに軽いお気持ちでお話なり御感想なりをおもらしなさいます、然しそれが本県にとっては実に重大なことがあるので御座います。」（那覇市役所、一九七〇、三五七）

「お偉い方々へ」と、優越した立場から批評をしてくれる知識人に対して、とても丁寧な言葉に包みながら痛烈な風刺を加えている。お偉い方々のありがたい啓発やお褒めの言葉を、素直に聞き入れ感謝することはできないという。そうして彼らが沖縄に発言する軽々しい態度は、辻通いをするツーリストの享樂的なふるまいと重ね合わせられるのである。

論争はその後もしばらく続き、東京の知識人にまで波及していった。だが実は、すでに早くも一月十八日の時点で、感情の落ち着いてきた地元知識層の間では、柳ら民芸協会同人への感謝会が辻の三杉楼で開かれていた。柳の手記によれば、当初は五、六人の集まりの予定だったが、話は大きくなっていき、当日の朝の新聞には「民芸協会同人に感謝する会」の告知記事が出ていたという。「あれほど沖縄に尽くしてくれている人たちに、滞在中に非難を浴びせる県民が出たのは申し訳ない」との気持ちからであった。会場に行ってみると、五、六十人もの参加者が集まっていた。挨拶の辞の後、琉球の唄・舞踊・料理・泡盛が供され、夜遅くまで宴は盛り上がった（谷川編、一九七〇、二七―二九）。方言論争の当座の收拾の仕方は結局のところ、典型的な観光客のもてなしに落ち着いていたのだった。

以上からも明らかのように、今もよく語り継がれるこの有名な沖縄方言論争は、もともととは観光をめぐる議論の文脈から立ち上がってきたものだった。観光協会が設定した観光座談会の場で、沖縄の伝統的な民芸や風景を求め絶賛してきたツーリストの柳たちが、沖縄観光への意見を求められいくつか述べる中で、標準語と方言の間

題も浮上してきたのである。だが、座談会の場でもその後の新聞紙上でも、沖縄側の人々の怒り心頭に達し話題の焦点になったのは、標準語と方言の問題であり、観光の話題は背景に退いていった⁽³⁵⁾。

より正確に言えば、むしろ観光の問題は依然語られていたが、観光振興という話題の内容から、話し手自らが観光客である当事者性を問う方向へ、論点がずれていったのである。すなわち、沖縄の人々が憤慨し違和感をもつたのは、柳ら中央インテリ文化人たちの、ツーリスト的な沖縄へのまなざしと語り口に対してであった。「素晴らしい、美しい日本古来の文化がここにある」と、柳らがどれだけ言葉尽くして沖縄をほめようと、彼らが沖縄を外から客観的に見て、上から批評していた姿勢は明らかであり、生活者の視点にはほど遠かった。沖縄に対するその外在的で客観的なまなざしは、芸術と観光の両面で重なってくる。アーティストとしてもツーリストとしても、柳たちは沖縄の生活者の立場とは相いれない宿命にあった。しかも沖縄側の怒りは、貴族的な知性主義・芸術至上主義への反感であり、一時のツーリズムへの反感であり、ヤマトの人間への不信感であり、それらが入り混じっていたわけである。

もっとも、「君等のやうな外来者が、一寸沖縄にきただけで、思ひつきの態度でものをいふな」と言われることに對して彼らは、何度も来ている者も、半年住んだ者もいると反論する。「沖縄の文化を考察する為に、既に長い準備の時期や各地への絶え間ない旅行が続けられて来たのである。われわれは不用意に沖縄に来た訪問客ではない。「単なる旅行者の一時の思ひつきで、沖縄を弄んでゐる如く評されるのは絶対に承服しがたい」(同、二六一―二七)と、一時のツーリストであることを否定し、より熟練した観察者であることをアピールするわけだが、言えは言うほど生活者との溝は埋まらず、柳らのツーリスト／文化人としての特異性は、逆に際立ってしまつたのであつた。

さて、方言論争が起こった昭和十五年は、国家主義が非常に強まっている時期でもあった。沖縄県学務部の声明書「敢て県民に訴ふ民芸運動に迷ふな」でも、標準語励行が「皇紀二千六百年」の「歴史的聖業を翼賛」する、「挙県一大県民の運動」であることを唱えていた。もちろん標準語は、大正期のソテツ地獄以降、本土や南洋諸島の出稼ぎ先で県民が受けた差別から身を守る意味も大きかったが、そのことがますます、標準的な日本人となつて国家に忠誠を尽くしていく意志を、内発的に強化していくのであった。

一方、これに対する柳宗悦らの立場も、国家主義を批判・否定するものではなく、むしろその流れの延長上にあった。彼らが沖縄の文化や方言を大切にして残すよう訴えるとき、地方の民衆文化の中に日本古来の真正の姿を発見する彼らの民芸運動は、地方の多様な郷土文化を国家に結びつけて活用・強化する、文化的ナシヨナリズムの志向性をもっていた。

だから、方言を擁護する本土文化人と、標準語を奨励する沖縄側の人々の間で起こった論争は、ちがう角度からであれば、あくまでもともに国家主義に奉仕する範囲内での対立なのであった。その大いなる国家主義が充満する時代の空気の中で、沖縄観光も高まってきた。だからこの論争は、ツーリストと地元民の対立としても現れてきたのであった。

九、むすびにかえて——国家主義時代の観光と知

沖縄観光は、後世に比べればはるかに小規模ながら、戦前から行われていた。国家主義が色濃く影響力をもつ時代にあつて、植民地観光と国内観光の境界、外地と内地の中間に置かれた微妙な立場から、沖縄は「国内最南

端の異国情緒あふれる島」として、エキゾチックなまなざしを向けられていた。昭和十二年には大型船の就航により、沖縄視察団のバックツアーが開始されるが、まさかそのわずか数年後に、彼らの訪れた南国の楽園が、激しい地上戦の場所へと変貌してしまふとは、思いもよらなかつたことだろう。

柳田國男の沖縄旅行が大きな契機となつて、沖縄をめぐる観光と知、沖縄学と沖縄イメージは、同時並行的・相互作用的に立ち上がっていく。またそれは、本土と沖縄の知識人・文化人のまなざしが、ツーリストと地元案内人の関係を通して、相互に重なりあい、影響しあうプロセスでもあつた。伊波普猷や島袋源一郎の仕事に見られたように、民俗学と郷土研究、沖縄観光と郷土教育は、互いに連動しあいながら発展していく。そこで立ち上げられる「郷土」は、大いなる国家の一部分として、従順に組み込まれていく。首里城の修復に巧妙に仕組まれたように、琉球処分以前の長い琉球の歴史は、為朝伝説なども活用しながら、日琉同祖論の枠組みの中に位置づけられ、それ自体がツーリストたちのノスタルジックなまなざしの対象にもなっていくのであつた。

このように、戦前期に形成・確立された沖縄観光と沖縄イメージは、沖縄戦による壊滅的な打撃と断絶を経て、戦後にはいかなる連続性と非連続性をもって受け継がれ、また新たに形成されていくのだろうか。もちろんこれについては、また次なる作業が必要である。

主な参考文献

- 秋守常太郎、一九三〇『沖縄土産』。
 有山輝雄、二〇〇二『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館歴史文化ライブラリー。
 安藤佳翠、一九三二『沖縄への旅』青山書店。

- 池田彌三郎・谷川健一、一九九四『柳田国男と折口信夫』岩波書店同時代ライブラリー。
- 梅田英春、二〇〇三「ローカル、グローバル、もしくは『ちゃんぶる』——沖縄観光における文化の多様性とその真
正性をめぐる議論」橋本和也・佐藤幸男編『観光開発と文化』世界思想社。
- 沖縄観光協会、一九六四『沖縄観光十周年史』。
- 小熊英二、一九九五『単一民族神話の起源（日本人）の自画像の系譜』新曜社。
- 同、一九九八『日本人の境界』新曜社。
- 河村只雄、一九九九『南方文化の探究』講談社学術文庫。
- 川村湊、一九九六『大東亜民俗学』の虚実』講談社選書メチエ。
- 神田孝治、二〇〇四『戦前期における沖縄観光と心象地理』『都市文化研究』大阪市立大学都市文化研究センター、四号、
十一―二十七。
- 後藤総一郎監修、柳田国男研究会編著、一九八八『柳田国男伝』三一書房。
- 子安宣邦、一九九六『近代知のアルケオロジー 国家と戦争と知識人』岩波書店。
- 笹森儀助、一九八二・一九八三『南嶋探験』一・二、平凡社。
- 佐藤惣之助、一九三七『旅窓読本』学芸社。
- 島袋源一郎、一九三二『新版沖縄案内』沖縄書籍。
- 同、一九四一『琉球百話』琉球史料研究会。
- 下村海南・飯島曼史、一九三五『南遊記』朝日新聞社。
- 白幡洋三郎、一九九六『旅行のススめ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』中公新書。

総理府審議室編、一九八〇『観光行政百年と観光政策審議会二十年の歩み』ぎょうせい。

高岡裕之、一九九三「観光・厚生・旅行―ファシズム期のツーリズム」赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム 戦時期日本における文化の光芒』日本経済評論社、九一―五二。

高良倉吉、一九七六「島袋源一郎論―その沖繩研究と天皇制イデオロギーに関する覚書―」『新沖繩文学』三三三号、特集「沖繩学の先覚者群像―人と学問―」二二八―一三五。

多田治、二〇〇四『沖繩イメージの誕生―青い海のカルチュラル・スタディーズ』東洋経済新報社。

谷川健一編、一九七〇『叢書わが沖繩第二巻 わが沖繩 下 方言論争』木耳社。

谷川健一、一九九六『沖繩 その危機と神々』講談社学術文庫。

戸邊秀明、二〇〇二「沖繩 屈折する自立」『近代日本の文化史』感情・記憶・戦争』岩波書店、二八一―三二九。

富山一郎、二〇〇二『暴力の予感 伊波普猷における危機の問題』岩波書店。

同、二〇〇六『増補 戦場の記憶』日本経済評論社。

那覇市役所企画部市史編集室編、一九七四『那覇市史 通史篇第2巻 近代史』那覇市役所。

那覇市役所総務部市史編集室編、一九七〇『那覇市史 資料篇第2巻中の3』那覇市役所。

南島研究会編、一九七五『柳田國男先生稿 南島旅行見聞記』。

野々村孝男編、二〇〇〇『懐かしき沖繩―山崎正薫らが歩いた昭和初期の原風景―』琉球新報社。

花田俊典、二〇〇六『沖繩はゴジラか―へ反―オリエンタリズム／南島／ヤポネシア』花書院。

比嘉春潮、一九五九「島袋源一郎」『日本民俗学大系十二』平凡社、二八五―二八六。

古川隆久、一九九八『皇紀・万博・オリンピック 皇室ブランドと経済発展』中公新書。

MacCannell, Dean, 1976, *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*, University of California Press.

又吉盛清、一九九〇『日本植民地下の台湾と沖縄』沖縄あき書房。

松田毅一、一九三七『台湾・沖縄の旅』大阪府立天王寺中学校印刷出版部。

村井紀、二〇〇四『新版 南島イデオロギーの発生 柳田国男と植民地主義』岩波現代文庫。

本山桂川、一九二五『南島情趣』聚英閣。

屋嘉比取、一九九九『古日本の鏡としての琉球―柳田国男と沖縄研究の枠組み―』『南島文化』二十一号、四五―一七三。

柳田国男、一九八九『柳田国男全集1』ちくま文庫。

由井晶子、一九七七『伊東忠太』『新沖縄文学』三七号、特集・「沖縄研究の先人たち」七八―八六。

横山健堂、一九一四『薩摩と琉球』二〇〇三復刻版、榕樹書林。

吉見俊哉編、二〇〇二『一九三〇年代のメディアと身体』青弓社。

琉球新報社会部編、一九八六『昭和の沖縄』ニライ社。

琉球新報社編、一九九九『新南嶋探険 笹森儀助と沖縄百年』琉球新報社。

付記 本研究は、平成十八〜二十年度科学研究費補助金・若手研究(B)「沖縄・八重山諸島における地域イメージの形

成・展開と社会変容」(研究代表者・多田治)への助成を受けた成果である。

(1) 戦前期の沖縄観光の研究は非常に少なく、私の知る限り、神田孝治氏による地理学的見地からの論文(神田、二〇〇四)があるのみである。また、宮里一夫氏は『観光とけいざい』二〇〇三年八月十五日号の「沖縄観光史を見

直す 戦前の沖縄観光について」で、戦前の沖縄観光の研究の重要性を指摘している。本論の執筆に際しては、両氏の論を大いに参考にさせていただいたことを付記しておきたい。

- (2) なお本研究は、二〇〇六年九月十四―十六日にイタリア・ヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で開催された第五回沖縄研究国際シンポジウム「想像の沖縄―その時空間からの挑戦」において、第十パネル「エキゾチックな沖縄の宣伝」の中で、多田が行った報告「沖縄イメージ、その発生と展開―想像の沖縄」と、方法としてのツーリストの内容を基礎にして、より本格的な作業を進めていくものである。シンポジウムで貴重な意見をくださった方々に、感謝の意を表したい。

- (3) 台北丸船長・深見麗水「琉球への船路」『海』大正十四年夏号、一一一。

- (4) この両面性を同じ一つの文章の中に体現したケースがある。辻井浩太郎は「沖縄観光の思ひ出」という紀行文で、台湾・満州・樺太・朝鮮を旅行して見てきたものとの対比で、沖縄をこう語る。「しかし沖縄の風物だけは全く独特であり、内地では少しも想像してゐない景観であった。他所で見られない新鮮味が最も多く感じられた。一口に云へば内地にこれ程変つた処が残つてゐるのかと実は驚いた程である。『海』昭和十三年五月号、二八、傍点は引用者。「内地では想像していない」と、沖縄を内地から区別した直後に、「内地の中にこれほど変わった所が残つてゐる」と、沖縄を内地に含み込んでいる。

- (5) 「沖縄視察団募集」『海』昭和十五年二月号、三五。傍点は引用者。

- (6) 辻井生（中学地理教師）「お奨めしたい琉球旅行」『海』昭和四年八月号、二八。傍点は引用者。

- (7) 「沖縄航路へおくる新造船波上丸」『海』昭和十二年新年号、三四。

- (8) 「第九回第十回沖縄視察団員募集」『海』昭和十四年新年号、七二。傍点は引用者。

- (9) 「沖縄視察団員募集」『海』昭和十三年三月号、三二。傍点は引用者。
- (10) 河邊昌之(第十六回沖縄視察団員)「沖縄の印象」『海』昭和十五年四月号、三十一—三二。
- (11) 「沖縄を語る座談会」『海』昭和十二年五月号、二四—二六。
- (12) 「沖縄航路・波上丸就航」『海』昭和十一年十二月号、六。
- (13) 辻井生「お奨めしたい琉球旅行」『海』昭和四年八月号、三四。
- (14) 阿部金剛「沖縄の印象」『海』昭和十三年新年号、四一。
- (15) 例えば、秋守、一九三〇などにおける見下したまなざしは、典型的である。
- (16) 辻井浩太郎「沖縄観光の思ひ出」『海』昭和十三年五月号、二八。
- (17) 辻井生「お奨めしたい琉球旅行」『海』昭和四年八月号、三一。
- (18) 安藤盛「沖縄風景」『海』昭和十二年新年号、三八。
- (19) 「沖縄を語る座談会」『海』昭和十二年五月号、二四。
- (20) 布田虞花「琉球国記」『海』昭和五年一月号、二二—二三。
- (21) 大野夢風「琉球遊記」『海』昭和九年七月号、二六、安藤奇峰「沖縄ばなし」『海』昭和十二年五月号、二六。
- (22) もともと柳田は学生時代、愛知県伊良湖岬の海岸に打ち寄せた椰子の実を見て、遙か彼方の南島へのあこがれを抱いたという。この南島へのロマンが後に、柳田の民俗学において現実に展開されていく。
- (23) 屋嘉比取の指摘によれば、沖縄では明治期後半から大正期に、道路・鉄道・港湾などのインフラ整備が大きく進められた(屋嘉比、一九九九、四五)。これはちょうど、笹森と柳田がそれぞれ沖縄を旅した二つの時期の間に当たり、両者が沖縄を旅した交通状況にはかなり格差があったことが察せられる。

- (24) 「当時少しでも沖縄方面の問題に関心をもった者は、誰も彼も言ひ合せた様に之を買求めた。」「此書を精読した人々が、現在の南島談話会を、創立したと謂つても大差は無い。」柳田による横山武夫『笹森儀助翁伝』序、『柳田国男全集』第二九卷、筑摩書房、一三九―一四一。
- (25) しかも柳田はこうした沖縄・先島への関心を、個別的なものにとどめず、より普遍的な見方へと活用しようとした。ジュネーブで国際連盟委任統治委員をつとめ、南洋諸島の統治形態の決定に関わった経験も加わって、世界中における日本の位置を、「島」のメタファーでとらえていった。島を国家の縮図としてとらえる彼の見方からは、沖縄・先島に日本を重ね合わせてとらえようとする、柳田のナショナルな普遍化志向が明らかにうかがえる。
- (26) 「郷土生活の研究法」『柳田国男全集』第八卷、筑摩書房、一五一。
- (27) 例えば、村井、二〇〇四、子安、一九九六、小熊、一九九五、屋嘉比、一九九九、川村、一九九六、など。
- (28) この時期の南島研究が、日本民俗学によって牽引されていったことは、その後の沖縄研究の方向性に大きく影響を与えたという意味でも、注目に値する事実である。
- (29) 以上の島袋の経歴については、比嘉、一九五九、高良、一九七六を参照。
- (30) このように、島袋源一郎の沖縄研究における天皇制イデオロギーの批判を、平成のイデオログとも言うべき高良倉吉が、沖縄海洋博の翌年の一九七六年に行っていた点は、非常に興味深い。二〇〇〇年の「沖縄イニシアティブ」で軍基地を容認する政治的発言が波紋を呼び、首里城再建をはじめ琉球史と日本をつなぐ数々の活動に手を染めてきた研究者・高良の営みそのものが、彼がかつて批判の対象とした戦前期の島袋の活動と、時代の文脈を越えてかなり似通った側面が多いようにも思われるのである。
- (31) 先の首里城の箇所でもふれたように、源為朝の琉球漂着からその子・舜天の琉球王統へ、という語りは、日琉同

祖を暗示する効果を發揮している。

(32) これは、明治三六（一九〇三）年の人類館事件の状況と似ている。大阪で行われた第五回内国勸業博覧会で、会場前に学術人類館がつくられ、アイヌ・台湾・朝鮮・支那などと一緒に、琉球人が「展示」された。沖縄県民はこの事態に激怒し、地元紙の琉球新報は抗議した。ただその際の論理は、「アイヌ生蕃らと本県人は同じではない」という、自らに含む植民地主義や差別の視点は問わないものであった。

(33) 例えば小熊、一九九八、花田、二〇〇六、戸邊、二〇〇二など。特に小熊、一九九八の十五章は、柳宗悦と方言論争について明確に整理しているので、詳細な全体像についてはそちらを参照されたい。

(34) 月刊民芸編輯部「問題の推移」『月刊民芸』昭和十五年三月号、直接の引用は谷川編、一九七〇、七一十。

(35) これは、以来現在に至るまでの沖縄方言論争の取り上げ方においても同様である。

（二橋大学大学院社会学研究科准教授）